

## 近畿大学奈良キャンパスにおいてイボイボナメクジの生息を確認

藤本将徳<sup>(a)</sup>・葛西弘<sup>(a)</sup>・澤畠拓夫<sup>(b)</sup>

<sup>a)</sup> 近畿大学大学院農学研究科環境管理学専攻, 生態系管理学研究室

<sup>b)</sup> 近畿大学農学部環境管理学科, 森林資源学研究室

### **The new records of *Granulilimax fuscicornis* in Nara campus of Kindai Univ.**

Masanori FUJIMOTO<sup>(a)</sup>・Hiro KASAI<sup>(a)</sup>・Takuo SAWAHATA<sup>(b)</sup>

<sup>a)</sup> *Major in Environmental Management, Graduate School of Agriculture, Kindai University,  
3327-204 Nakamachi, Nara, Nara 631-8505, Japan*

<sup>b)</sup> *Department of Environmental Management, Faculty of Agriculture, Kindai University,  
3327-204 Nakamachi, Nara, Nara 631-8505, Japan*

#### **Synopsis**

We collected three slug individuals of *Granulilimax fuscicornis* from two sites of secondary broad-leaved tree forests in Nara campus of Kindai University located in Nara Prefecture, western Japan in Feb. and July 2019. This is the third record of *G. fuscicornis* in Nara Pref. and the new record in the northern part of area of Nara Pref.

Keywords: *Granulilimax fuscicornis*, Rathousiidae, Nara Prefecture, new record

## 1. 緒言

カタツムリやナメクジなどの陸産貝類は、その移動性の乏しさから地理的分布域が限定される傾向にあり<sup>1)</sup>、多くの種がレッドデータリストに記載されている。

イボイボナメクジ *Granulilimax fuscicornis* Minato, 1989 は体長 20mm 程度の小型のナメクジである。軟体部は橙色を帯びた淡褐色で、背面が黒褐色の縦線によって細長く縁どられること、外套膜が微細な顆粒に覆われていること、触角が灰黒色であることなどの特徴を有する<sup>1)2)</sup>。本種は一般的なナメクジ類から系統的に遠い収柄眼目ホソアシヒダナメクジ科に属するとされており<sup>3)</sup>、どの生息地でも希少であること、他の陸生貝類を捕食するという極めて僅少な肉食性の種であることなどから注目されてきた<sup>4)</sup>。

本種は 2015 年時点で、19 都道府県から記録されており、環境省カテゴリーでは準絶滅危惧種(NT)、奈良県カテゴリーにおいては 2 記録のみの情報不足種とされている<sup>5)</sup>(図 1)。

このたび著者らは近畿大学奈良キャンパスにおける土壌動物調査中にイボイボナメクジらしき生物の生息を確認したため、これを報告する。

## 2. 材料及び方法

調査は 2018 年 2 月 20 日に図 2 で示す地点 A、2019 年 7 月 17 日に地点 B で行った。いずれの調査も中大型土壌動物を採集する目的で、5×5mm メッシュの金属製ふるいを用いたリター層を含む土壌表層のふるい採集を行う際に、5×5mm メッシュを通過しない落葉の表裏を目視した。

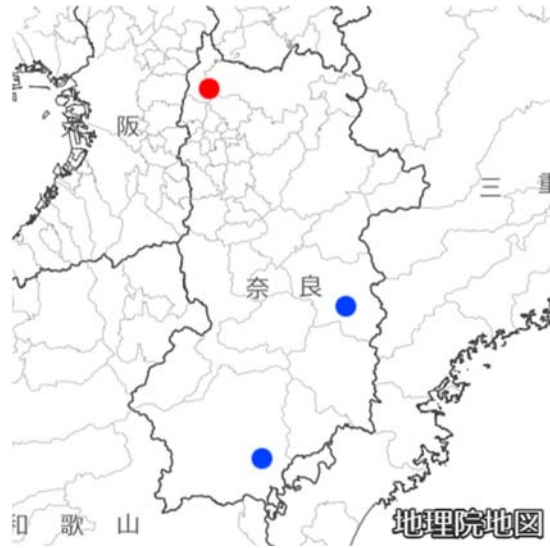


図 1 本報での生息地と県内の記録  
赤：本報での生息地  
青：既知の生息記録地



図 2 近畿大学奈良キャンパス付近

## 3. 結果

地点 A における 2019 年 2 月 20 日の調査においてイボイボナメクジと思しき生物を 1 個体、地点 B における 2019 年 7 月 17 日の調査において 2 個体、計 3 個体を見出した。

地点 A の個体(図 3A)は伸長時で体長約 16mm 体幅約 2.5mm、地点 B の個体(図 3B)

はいずれも伸長時体長約 20mm 体幅約 2.5mm であった。外部形態の特徴として、3 個体共通して淡褐色～濃褐色の軟体部は体側上部を黒褐色の縦線で縁どられ、軟体部背面は微細な顆粒状突起で覆われており、触覚は灰黒色であった。これはイボイボナメクジ *Granulilimax fuscicornis* の原記載である湊(1989)の記述と一致した。

得られた個体は執筆時点で飼育中のため、解剖学的知見は得られていない。飼育下では、餌としてトクサオカチョウジガイ *Allopeas javanieum* を一度に 5 個体程度投入すると数日後には全てが殻になっており、よく摂食している模様であった。

生息環境の特徴として地点 A は二次林内の谷部で落葉を含む腐植層の豊富な土壌を有しており(図 4)、地点 B は二次林内の池付近に位置し、斜面の立木に落葉が堆積している環境で(図 5)、いずれの生息地も比較的湿潤な環境であった。

#### 4. 考 察

イボイボナメクジは記載以来日本各地からの報告により記載時の形質に該当しないグループが複数確認されており<sup>67)</sup>、湊(2015)では、外部形態等から「イボイボナメクジ」「イボイボナメクジ類未記載種」「クロツブナメクジ」「その他イボイボナメクジ種群」と分別されている。本調査によって得られた 3 個体は、飼育下においてイボイボナメクジ類で特徴的である貝類食性を示し、イボイボナメクジ (*G. fuscicornis*) の特徴である、軟体部が淡褐色～濃褐色で黒褐色の縦線によって縁どられ、背面を微細な顆粒で覆われ、灰黒色の触覚を有することからイボイボナメクジと同定された。



図 3 本調査で得られた個体

- A: 地点 A で得られた個体  
(2019 年 2 月 20 日採集)
- B: 地点 B で得られた個体  
(2019 年 7 月 17 日採集)



図 4 地点 A の環境



図 5 地点 B の環境

今後は、解剖学的検討と分子レベルでの解析を行うことで、当地域に産するイボイボナメクジの分類学的位置付けが明らかになると期待される。

奈良県における本種の記録は1992年吉野郡十津川村小川(湊 宏採集)、1993年吉野郡川上村入之波(湊 宏採集)の2記録のみとされており<sup>8)</sup>、本報における記録は県内3例目となる。また前2例の採集地は県内でも自然度の高い南部の山岳地帯であったが、本報における採集地は記録の空白地帯であった奈良県北部の都市近郊里山林であった。本報における本種の記録は奈良県北部初記録となったと同時に本種が都市近郊の里山林のような環境にも生息していること、奈良県全域に生息している可能性を示唆するものとなった。

一方で捕食性である本種は、餌となる他の有殻陸産貝類の減少と草本植生のシカ食害などが減少要因になり得るとされており<sup>1)</sup>、他都道府県と同様にシカ食害の深刻化が問題視されている奈良県では、少なからぬ個体群が絶滅の危機に瀕している可能性も考えられる。さらなる調査による適切な保全状況評価が望まれる。

## 6. 謝 辞

情報の提供をいただいた瀬尾友樹氏と大北祥太郎氏にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

## 7. 要 約

2019年2月および7月に、近畿大学奈良キャンパスの2箇所異なる広葉樹二次林内で、計3個体のイボイボナメクジの生息を確認した。イボイボナメクジの生息確認は、

奈良県で3例目、奈良県北部地域では初めての事例となる。

## 8. 引用文献

- 1) 滋賀県 (2016) 滋賀県で大切にすべき野生生物: 滋賀県レッドデータブック 2015年版.
- 2) 湊宏 (1989) 日本産ナメクジ科の新属新種, イボイボナメクジの記載. 貝類学雑誌 48:255–258.
- 3) 湊宏 (2000) 京都大学瀬戸臨海実験所構内の陸産貝類. 南紀生物 42:89–92.
- 4) 湊宏 (2015) 陸産貝類研究備忘録 (14) イボイボナメクジ種群 (ホソアシヒダナメクジ科) の分布とその文献抄. 阪神貝類談話会機関誌かいなかま 49:1–12.
- 5) 奈良県 (2017) 大切にしたい奈良県の野生動植物-奈良県版レッドデータブック 2016改訂版-.
- 6) 湊宏 (2009) 殻表に穿孔痕をもつクニガミゴマガイの謎. ちりぼたん: 日本貝類学会研究連絡誌: newsletter of the Malacological Society of Japan 2:96–100.
- 7) 湊宏 (2009) 大島(和歌山県)の陸産貝類. 南紀生物 51:24–32
- 8) 湊宏, 増田修, 矢野重文 (1996) イボイボナメクジの新分布記録. ちりぼたん 26:100–101